



現代語訳  
1  
万国珍が浙江省東部を占拠していた頃、明州（浙江省鄞県）では、毎年正月の十五夜の日から五夜にわたり灯籠祭りが行われ、城下に住む男女は、こぞつてこの祭りを気ままに見物しに出かけた。至正庚子（一三六〇）年、浙江省寧波にある鎮明嶺の麓に喬という青年が住んでいた。妻を亡くしたばかりで、あじけない鰥（こ）暮らしで、灯籠見物などに出かける気も起こらず、ただ門にもたれてぼんやりと佇んでいた。十五夜の三更（夜中の十一時から一時）も過ぎ、見物人も少なくなってきた頃、一人の美しい女性が双頭の牡丹の花を描いた提灯を提げた女中を先に立てて歩いているのが見えた。年の頃は十七、八歳ほどで、紅い袴に翠の上衣という装い、みめ美しくしなやかで、二人してゆつくりと西の方へと歩いて行く。喬は月明かりの下で、その女性をじっと見つめた。顔立ちは美しく若々しく、まことに絶世の美女であった。喬は魂を奪われてぼうっとして、ときめく気持ちを抑えきれずに、その後をたいて行つた。先になり後になり、数十歩ほど行くと、その美女は突然振り返つてにっこり微笑みながら、「はじめから桑中のお約束をしていたわけではありませんが、わたくしたちが月の下でめぐり逢つたのは、偶然ではなかったのではありませんか」と言う。喬はすぐに前へ歩み出て「一礼し、私の家はすぐ近くです。お嬢さん、ちよつと立ち寄つていらつしやいませんか」と言つた。女は拒む様子もなく、女中を呼んで、「金蓮や、提灯を提げて一緒に参りましょう」と言つた。すると、前を歩いてきた女中がもどつてきて、喬は女の手を取つて家に連れて行つた。そして二人は歓びの限りを尽くし、その楽しさは巫山、洛浦の出会いにも勝るものであった。

方氏の据る浙東一也、毎歲元夕、於明州張灯五夜、傾城士女、皆得縱觀。至正庚子之歲、有喬生者、居鎮明嶺下、初喪其偶、鰥居無聊、不復出遊、但倚門佇立而已。十五夜三更、遊人漸稀。見一丫鬟挑雙頭牡丹灯前導、一美人隨後。約年十七八、紅裾翠袖、婷婷嫋嫋、迤邐投西而去。生於月下視之、韶顏稚齒、真國色也。神魂飄蕩、不能自抑、乃尾之而去。或先之、或後之、行數十步、女忽回顧而微哂曰、初無桑中之期、乃有月下之遇、似非偶然也。生即趨前、揖之曰、弊居咫尺、佳人可能回顧否。女無難意、即呼丫鬟曰、金蓮、可挑灯同往也。於是、金蓮復回、生与女携手至家、極其歡昵、自以為巫山洛浦之遇、不是過也。

書名：中国古典小説選 8 剪燈新話  
作者：竹田晃 / 小塚由博  
編者：竹田晃 / 黒田真美子  
頁碼：162-171  
出版者：明治書院  
出版時間：2008

原文

方氏の据る浙東一也、毎歲元夕、於明州張灯五夜、傾城士女、皆得縱觀。至正庚子之歲、有喬生者、居鎮明嶺下、初喪其偶、鰥居無聊、不復出遊、但倚門佇立而已。十五夜三更、遊人漸稀。見一丫鬟挑雙頭牡丹灯前導、一美人隨後。約年十七八、紅裾翠袖、婷婷嫋嫋、迤邐投西而去。生於月下視之、韶顏稚齒、真國色也。神魂飄蕩、不能自抑、乃尾之而去。或先之、或後之、行數十步、女忽回顧而微哂曰、初無桑中之期、乃有月下之遇、似非偶然也。生即趨前、揖之曰、弊居咫尺、佳人可能回顧否。女無難意、即呼丫鬟曰、金蓮、可挑灯同往也。於是、金蓮復回、生与女携手至家、極其歡昵、自以為巫山洛浦之遇、不是過也。

書き下し文

方氏の浙東に据るや、毎歲元夕、明州に於て灯を張ること五夜、傾城の士女、皆縱觀するを得たり。至正庚子の歲、喬生なる者有り、鎮明嶺下に居り、初め其の偶を喪ひ、鰥居して無聊、復た出遊せず、但だ門に倚りて佇立するのみ。十五夜の三更、遊人漸く稀なり。一丫鬟の双頭の牡丹灯を挑げて前に導き、一美人の後に随ふを見る。約年十七八、紅裾翠袖、婷婷嫋嫋として、迤邐として西に投じて去る。生月下に於て之を視れば、韶顏稚齒にして、真の國色なり。神魂飄蕩し、自ら抑ふること能はず、乃ち之を尾けて去く。或いは之に先んじ、或いは之に後れ、行くこと数十歩にして、女は忽ち回顧して微かに哂ひて曰はく、初め桑中の期無きも、乃ち月下の遇有るは、偶然に非ざるに似たり、と。生は即ち趨り前みて、之に揖して曰はく、弊居は咫尺なれば、佳人能く回顧す可きや否や、と。女は難む意無く、即ち丫鬟を呼びて曰はく、金蓮、灯を挑げて同に往くべし、と。是に於て、金蓮復た回り、生は女と手を携へて家に至り、其の歡昵を極めて、自ら以為へらく、巫山洛

語注

○方氏「万国珍（二二一九—一三七四）のこと。元の末期、反乱を起こして浙江省東部を占拠する。後に朱元璋（明の太祖）に降伏した。○嫫居「妻を亡くしてやもめ暮らしをすること。○Y「髪」女の召使い。○婷婷嫋嫋「婷婷」はおだやか、「嫋嫋」は美しいさま。○韶顔稚齒「年若い美女の形容。○国色「絶世の美女。○桑中之期」「詩経」鄭風の「桑中」の詩に見える。桑畑で密会する詩。ここでは密会の約束を交わすことを言う。○月下之遇「李白の詩「清平調」一首目に「若し群玉山頭に見るに非ざれば、会ず瑤台月下に向いて逢はん」とある。○巫山洛浦之遇「巫山」は宋玉『神女賦』に見える巫山の神女を、「洛浦」は曹植『洛神賦』に見える洛水の神女を指す。

— 浦の遇も、是れに過ぎざるなり、と。

現代語訳

2

喬が名前や住んでいる場所を尋ねると、女は、「わたくしは、姓を符、字を麗卿、名は淑芳と申します。もと奉化州（浙江省寧波府）の書記官の娘でございます。父が亡くなつてから、家は落ちぶれ、兄弟もなく頼れる親戚もなく、わたくし一人だけが残されてしまい、金蓮と一緒に湖の西に仮住まいしております」と言つた。喬が女を引き留めたので、その晩は喬の家に泊まることになった。女の物腰はとも妖艶で、言葉遣いもなまめかしく、寝台の帷を下ろして枕を近づけると、二人は欲情を燃やしきるまで愛し合ったのであつた。

朝になると、女は別れを告げて帰つて行つた。そして、日が暮れるとまたやつてくる。このようにして半月が経とうとした頃、喬の様子を怪しんだ隣の家の老人が、壁に穴を開けて喬の家の様子を見

いてみると、化粧をした鬘髻が喬と並んで灯りのもとに座っているではないか。腰を抜かさんばかりに驚いた老人が、翌朝になつて喬を問いつめた。しかし、喬は固く口を閉ざしてわけを話そうとはしなかつた。そこで、老人は、「あんた、とんでもないことになるぞ。人間は精気盛んな陽気の権化、幽霊は陰気の世の邪悪で穢れたもの。なのにあんたは陰気の世の化け物と一緒にいるのにそれと気付かず、邪悪で穢れた奴と枕をともにして平気でいる。でも、一旦精気を吸い取られたら最後、禍が降りかかり、あんたはその若さであの世行きだ。ああ、気の毒に」と言つた。喬はそれを聞くと驚いて、ようやく詳しくわけを話し始めた。すると老人が、「その女が湖の西に仮住まいしていると云つていたなら、そこへ行つて尋ねてみなされ。何か分かるかもしれない」と言つたので、喬は老人に言われた通りに、早速、月湖の西へ行き、長い堤防の上や高い橋の下などを行ったりきたりして、そこに住んでいる人や行きずりの人に女のことを聞いてみたが、誰もがそんな女はいないと言う。

そのうちに日が暮れかかつてきたので、湖心寺へ行つて少し休むと、寺の東側にある廊下をくまなく歩き、また西の廊下へとまわつてみた。すると、廊下の突き当たりに暗い部屋があり、中を覗いてみると、そこには仮に預けられていた棺があつた。棺の蓋には白い紙が貼つてあり、「故奉化州符州判女麗卿之柩」「故の奉化州符書記官の娘麗卿の棺」と書かれていた。さらに、棺の前には双頭の牡丹灯籠が吊され、灯籠の下には死者に供えた人形が立ててあり、その人形の背中には「金蓮」と書いてあつた。喬はそつとして身の毛がよだち、全身鳥肌立ち、寺を飛び出すと振り返ることなく一目散に逃げ帰つた。その晩は隣の老人の家に泊めてもらったが、恐れおののくさまは、はた目にもありありと見てと

れた。老人は言った。

「玄妙観の魏法師様は、あの寺の開祖の王真人のお弟子様で、お書き下さる護符の効力は、当代随一だと聞いておる。あんた急いでそこへ行ってお願ひしてみなされ。」

翌朝、寺に近づいてくる喬を遠くから見た法師は驚いて言った。

「これは酷い妖気だ。どうしてここへおいでになられた。」

喬はその前にひれ伏して、これまでのことを詳しく話した。すると法師は朱で書いた護符を二枚喬に渡し、一枚はドアに貼り、一枚は寝台に貼るように言い、さらに、二度と湖心の寺に足を踏み入れてはならないと戒めた。喬は護符を受け取ると家へもどり、法師に言われた通りに護符を貼った。するとその後、女は現れなくなった。

# 原文

生問「其姓名居址」。女曰、姓符、麗卿其字、淑芳其名、故奉化州判女也。先人既歿、家事零替。既無弟兄、仍鮮族党。止妾一身、遂与金蓮僑居湖西爾。生留之宿、態度妖妍、詞氣婉媚、低幃暱枕、甚極歛愛。天明、辭別而去。及暮、則又至。如是者將半月。隣翁疑焉、穴壁窺之、見一粉妝髻

# 書き下す

生は其の姓名居址を問ふ。女曰はく、姓は符、麗卿は其の字、淑芳は其の名にして、故の奉化州判の女なり。先人既に歿し、家事零替す。既に弟兄無く、仍ぬるに族党鮮し。止だ妾一身のみは、遂に金蓮と湖の西に僑居す。と。生は之を留めて宿せしむれば、態度は妖妍、詞氣は婉媚にして、幃を低らし枕を暱づけて、甚だ歛愛を極む。天明、辭別して去る。暮に及べば、則ち又至る。是くの如くする者。將に半月ならんとす。隣翁

體与生並坐於灯下、大駭。明旦詰之、秘不肯言。隣翁曰、嘻、子禍矣。人乃至盛之純陽、鬼乃幽陰之邪穢。今、子与幽陰之魅同处而不知、邪穢之物共宿而不悟。一旦真元耗尽、灾眚来臨、惜乎以青春之年、而遽為黄壤之客也。可不悲夫。生始驚懼、備述厥由。隣翁曰、彼言僑居湖西。当往物色之、則可知矣。生如其教、逕投月湖之西、往來於長堤之上、高橋之下、訪於居人、詢於過客、並言無有。日將夕矣、乃入湖心寺。少憩、行遍東廊、復轉西廊、廊尽处、得二暗室、則有旅櫬、白紙題其上曰、故奉化符州判女麗卿之柩。柩前懸一雙頭牡丹灯、灯下立一盟器婢子、背上有二字曰「金蓮」。生見之、毛髮尽豎、寒栗遍體。奔走出寺、不敢回顧。是夜、借宿隣翁之家、憂怖之色可掬。隣翁曰、玄妙観魏法師、

これを疑ひ、壁に穴けて之を窺へば、一の粉妝せる髻體の生と並びて灯下に坐すを見、大いに駭く。明旦之に詰するも、秘して肯て言はず。隣翁曰はく、嘻、子禍あらん。人は乃ち至盛の純陽、鬼は乃ち幽陰の邪穢なり。今、子は幽陰の魅と同居して知らず、邪穢の物と共に宿して悟らず。一旦真元耗尽し、灾眚来臨すれば、惜しいかな青春の年を以て、遽かにして黄壤の客と為るを。悲しまざる可けんや。と。生始めて驚き懼れ、備さに厥の由を述ぶ。隣翁曰はく、彼は湖西に僑居すと言ふ。當に往きて之を物色すべくんば、則ち知る可けん、と。生は其の教の如くし、逕ちに月湖の西に投じ、長堤の上、高橋の下を往來し、居人に訪ひ、過客に詢ぬるも、並びに有ること無しと言ふ。日將に夕ならんとし、乃ち湖心寺に入りて少らく憩ひ、行きて東廊を遍くし、復た西廊に転ずれば、廊の尽くる処に、一暗室を得たるに、則ち旅櫬あり、白紙もて其の上に題して曰はく、故の奉化符州判の女麗卿の柩なりと。柩前に一雙頭の牡丹灯を懸け、灯下に一盟器の婢子を立て、背上に二字有りて金蓮と曰ふ。生は之を見て、毛髮尽く豎ち、寒栗遍

故開府王真人弟子、符籙為「当今第一」。汝宜「急往求」焉。明旦、生指「觀内」、法師望「見其至」、驚曰、「妖氣甚濃、何為來」此。生拜「于座下」、具述「其事」。法師以「朱符二道」授之、令「其一置於門」、一懸「於榻」、仍戒不「得」再「生往湖心寺」。生受「符而歸」、如「法安頓」。自「此果不」來矣。

に遍し。奔走して寺を出で、敢へて回顧せず。是の夜、宿を隣翁の家に借るに、憂怖の色掬す可し。隣翁曰はく、玄妙觀の魏法師は、故の開府王真人の弟子にして、符籙は当今第一為り。汝宜しく急ぎ往きて焉に求むべし。明旦、生觀内に指ふに、法師は其の至れるを望見し、驚きて曰はく、妖氣甚だ濃し、何為れぞ此に來る、と。生座下に拝し、具さに其の事を述べ。法師朱符二道を以て之に授け、其の一を門に置き、一は榻に懸け、仍ほ戒めて再び生をして湖心寺に往くを得ざらしむ。生は符を受けて歸り、法の如くに安頓す。此れ自り果たして來らず。

## 語注

○灾眚「わざわい」。○黄壤之客「黄壤」は、あの世。○旅櫬「故郷を離れた地で亡くなった人を故郷に埋葬するまで一時的に預けてある柩」。○盟器婢子「死者といつしよに墓に葬る召使いの人形」。○寒粟「鳥肌」。○玄妙觀「現在の浙江省鄞県の東南にある道教の寺」。

## 現代語訳

3

一月余りして、喬は寧波の袞繡橋に住んでいる友人を訪ね、腰をすえて酒をしこたま飲み、酔っぱらって法師の教えなどすっかり忘れてしまい、湖心寺を通る近道をとって帰ってしまった。寺の門前に近付くと金蓮が出迎え、進み出て喬に一礼してから、「お嬢様は長いことあなた

様をお待ちになつていらっしゃいました。どうしてこのような薄情なお振舞をなされたのですか」と言う。そして、喬は西の廊下へと引つ張られて行き、まっすぐにあの暗い部屋へ連れ込まれてしまった。女はいつもと変わらぬ様子でそこに座っていて、喬を責めたてた。

「わたくしとあなたはもととお知り合いの仲ではなかったのですが、たまたま灯笼祭りの灯りの下で出逢い、あなたのお情けをありがたくちょうだいして、わたくしの身も心もあなたに捧げてあなたにお仕えし、夜にうかがって朝に帰り、薄情なことをした覚えはございませんのに、何故あのような怪しげな道士の言うことなど信じて、わたくしにお疑いの気持ちを生じて縁を絶ち切ろうとなさったのです。こんな薄情なことをなさるなんて、恨めしく思っております。でも、幸いにも今日はこうしてお目にかかることができました。もうお放しいたしませんわ。」

そうと言うなり、女は喬の手をつかむと、棺の前に引つ張って行った。そのとたんに、棺の蓋が独りでに開き、喬は女に抱きかかえられたまま棺の中に一緒に入った。棺の蓋はすぐに閉まり、喬はとうとう棺の中で息絶えたのだった。

喬がなかなか帰ってこないで不審に思った隣の老人は、あちこち聞いて回ったあげくに、湖心寺の棺を安置してある部屋へとやってきた。見ると棺の隙間から喬の着物の裾がわずかにはみ出している。そこで寺の僧に頼んで棺を開けてもらうと、喬は死んでからすでにずいぶん時間が経っているようだった。喬は棺の中で女の屍と抱き合っており、女の顔はまるで生きているかのようなうであった。寺の僧は嘆息して、「この人は奉化州の書記官だった符さんの娘さんで、十七の時に亡くなられたんですよ。とり



あえず棺をここに預けられて、ご家族は北に移られたんですが、それから音信がとだえましてね。もう十二年になります。この娘さんがこんな恐ろしいことをなさると思ひもしませんでした」と言つた。そこで、喬の屍と女の棺を西門の外に葬つた。

## 原文

一月有余、往<sub>レ</sub>袞繡橋、訪<sub>レ</sub>友留飲。至<sub>レ</sub>醉、都忘<sub>二</sub>法師之戒<sub>一</sub>、逕取<sub>二</sub>湖心寺路<sub>一</sub>以回。將<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>寺門<sub>一</sub>、則見<sub>二</sub>金蓮迎<sub>一</sub>拜於前。曰、娘子久待。何一向薄情如<sub>レ</sub>是。遂与<sub>二</sub>生入<sub>一</sub>西廊、直抵<sub>二</sub>室中<sub>一</sub>、女宛然在<sub>レ</sub>坐、数<sub>レ</sub>之曰、妾与<sub>二</sub>君素非<sub>一</sub>相識、偶於<sub>二</sub>灯下一見<sub>一</sub>、感<sub>二</sub>君之意<sub>一</sub>、遂以<sub>二</sub>全体<sub>一</sub>事<sub>二</sub>君<sub>一</sub>、暮往朝来、於<sub>二</sub>君不<sub>レ</sub>薄。奈何信<sub>二</sub>妖道士之言<sub>一</sub>、遽生<sub>二</sub>疑惑<sub>一</sub>、便欲<sub>二</sub>永絶<sub>一</sub>薄倖如<sub>レ</sub>是、妾恨<sub>二</sub>君深矣<sub>一</sub>。今幸得<sub>レ</sub>見、豈能相捨。即握<sub>二</sub>生手<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>柩前<sub>一</sub>、柩忽自開、擁<sub>二</sub>之同入<sub>一</sub>、隨即閉矣。生遂死<sub>二</sub>於柩中<sub>一</sub>。隣翁怪<sub>二</sub>其不<sub>レ</sub>歸、遠近尋問。及<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>寺中停<sub>一</sub>柩之室、見<sub>二</sub>生之衣裾微露<sub>一</sub>於柩外。請<sub>二</sub>於寺僧<sub>一</sub>而發<sub>レ</sub>

## 書き下し文

一月有余にして、袞繡橋に往き、友を訪ねて留飲す。酔ふに至り、都て法師の戒を忘れ、逕ちに湖心寺に路を取りて以て回らんとす。將に寺門に及ばんとすれば、則ち金蓮の前に迎拜するを見る。曰はく、娘子久しく待つ。何ぞ一向に薄情はくのならんや、と。遂に生と西廊に入り、直ちに室中に抵れば、女は宛然として坐に在り、之を数めて曰はく、妾と君とは、素より相識るに非ず、偶々灯下に於て一たび見え、君の意に感じ、遂に全体を以て君に事へ、暮に往き朝に來り、君に於て薄からず。奈何ぞ妖道士の言を信じ、遽かに疑惑を生じ、便ち永く絶たんと欲すとは。薄倖なることはくの如く、妾の君を恨むこと深し。今幸いに見ゆるを得たれば、豈に能く相捨てんや、と。即ち生の手を握り、柩の前に至れば、柩は忽ち自づから開き、之を擁して同に入り、

之、死已久矣。与<sub>二</sub>女之屍<sub>一</sub>俯仰臥<sub>二</sub>於内<sub>一</sub>、女貌如<sub>レ</sub>生焉。寺僧嘆曰、此奉化州判符君之女也。死時年十七、權厝<sub>二</sub>於此<sub>一</sub>、拳<sub>二</sub>家赴<sub>一</sub>北、竟絶<sub>二</sub>音耗<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>今十有二年矣。不<sub>レ</sub>意作<sub>レ</sub>怪如<sub>レ</sub>是。遂以<sub>二</sub>屍柩及生<sub>一</sub>殯<sub>二</sub>於西門之外<sub>一</sub>。

随ひて即ち閉づ。生遂に柩中に死せり。隣翁は其の歸らざるを怪しみ、遠近に尋問す。寺中の柩を停むるの室に至るに及べは、生の衣裾の微かに柩の外に露はるを見る。寺僧に請ひて之を發けば、死して已に久し。女の屍と俯仰して内に臥し、女の貌は生けるが如し。寺僧は嘆じて曰はく、此れ奉化州判の符君の女なり。死せる時年十七、權に此に厝き、家を挙げて北に赴き、竟に音耗を絶ち、今に至りて十有二年なり。意はざりき怪を作すことはくの如きとは。遂に屍柩及び生を以て西門の外に殯す。

## 語注

○袞繡橋 現在の浙江省郵県の西南にある橋。  
殯 棺を埋葬する前に安置して祭ること。かりもがり。

○停柩 棺を埋葬せずに一時的に安置しておくこと。

## 現代語訳

4

それからというもの、どんより曇った昼間や、月の出ない暗い夜に、喬と女が手を取り合つて、その前を双頭の牡丹の提灯を提げた女中が先立つて歩いている姿がよく見られるようになった。そして、それに出会った者は、重病にかかり、寒気と高熱に苦しめられた。生前の功德を褒めそやして経を上げ、ご馳走や酒肴を供えて祀れば病は回復したが、何もしなければ死んでしまう。人々はとても恐れ、我先にと玄妙観へ行き、魏法師に会って訴えた。すると法師は、「わしの護符は、事